

## 校内研究の活性化

### ー 全国大会を真の学びの機会とするために ー

学籍番号 (209129)

氏 名 (宮下 由美子)

主指導教員 (木原 俊行)

## 1. 現状と課題

所属校は、本実践開始の2年後に社会科の全国大会の会場校として授業を公開することになっていたが、それまでに校内研究で対象としている教科は、理科と国語科であった。それゆえ、社会科の研究知見は蓄積されていなかった。また、若手や教職経験の浅い講師が全教員の3割以上を占め、加えて社会科の研究を経験した教員は2、3名しかいない状況であった。そのため、社会科を中心に授業力を向上させることが急務の課題となっていた。これまでの校内研究の取り組みに関する調査を実施した結果、若手教員は学びを実感しているが、中堅になるとその実感は低下し、ベテランになるとやや増加している傾向や、教員間での授業改善に向けた対話があまりなされていないことが明らかになった。先行研究からも、全国大会会場校などの外部から委託された研究は、教員の問題意識が反映されにくいということが明らかになっている。

これらのことを踏まえて、全国大会に向かって校内研究を活性化し、全国大会を真の学びの機会にすることを本研究の目的とした。

## 2. 校内研究活性化の方針と計画

校内研究を活性化し、全国大会を教員にとっての真の学びの機会とするには、教師集団が研究授業をつくる過程や研究の進め方に関する意思決定に創造的に参加する状況、すなわち「専門的な学習共同体」千々布 (2014) となる必要があると考えた。そのために、本実践では「ビジョンを達成できる授業づくり」と「学びの場としての討議会」という、2つの取り組みを柱に実践研究を進めた。

## 3. ビジョンを達成できる授業づくり

まず、組織としてのビジョンの共有を図った。そして、ビジョンの達成に向けて「目標を立てる、その実現に向けて取り組む、省察する」というサイクルを、授業づくりの過程で繰り返し、はじめに描いたビジョンに校内研究の取り組みが近づくようにした。

授業づくりではチームによる活動を支柱に据えた。学級担任、特別支援担任、担任外の教員が所属するようにチームを構成し、互いの専門性をいかした提案や教材開発が行えるようにした。専門性をいかすために、学級担任間や特別支援担任間といった立場ごとに集まって目標を考える機会も設けた。半年ごとにチームによる活動を省察をし、次の目標について考えていった。

これらの実践に対する教員アンケートから、チームの一員として、役割を果たす中で、多くの学びや感動があることがわかった。専門性をいかした創造的な取り組みに繋がったと考える。

## 4. 学びの場としての討議会

研究授業に関する討議会では、討議の方向性を可視化することに重点を置いた。具体的には、事前に討議の視点を文書で配付する。全体討議の記録をホワイトボードに残す。会の最後に、教員が振り返りを書く。これらの取り組みを毎行ったことで、初めは、1コマの授業の進め方などの形式的なことに関する意見が多く出ていたのが、回を重ねるにつれて、目標にせまるための教師の発問や資料活用に関する新たな提案が出されるようになった。

また、1年目と2年目では、所属校の現状に合わせて、参加の対象や時間配分などを変えて討議会を進行した。1年目は、全員参加とし、全体討議の時間も長く取った。2年目は、参加者を限定した上で、グループ討議を中心に討議を行なった。回を重ねるごとに討議の深まりが感じられた。また、参加者を限定した会では、前年度はあまり発言が見られなかった教員が積極的に発言する姿が見られた。発言する機会が増えたことから、学んだことの整理、確認、定着に繋がったのではないかと考える。

## 5. まとめと今後の展望

本実践のまとめのために、同僚・外部研究員へのアンケート調査、外部講師へのインタビュー調査を行った。同僚へのアンケート調査では、研究授業・討議会に関する学びやチームでの取り組みなどについて尋ねた。外部講師や外部研究員へ調査では、実践研究に取り組んだ2年間での、所属校の教員の授業に対する取り組みの変容について尋ねた。

同僚へのアンケート調査の結果から、討議会は1年目2年目のどちらも学びになったが、全員参加の討議会の方が学びの実感が高いことが明らかになった。学年部会では8割以上の教員が専門性をいかして取り組んでいたことや学級担任以外の教員にも学びがあったということがわかった。外部研究員・講師からは、討議会での発言や授業で活用する資料の開発、児童の学びに対する見取りの姿などを通して2年間での変容が見られたとの評価であった。

以上より、共有されたビジョンに向かってチームで授業づくりを行えるような組織編成を行うことや討議会では討議の方向性を焦点化することが教員の学びに繋がることを確認できた。

今後の展望としては、木原ほか（2015）の校内研究発展の4層モデルを参考に、エビデンスやネットワークの構築に取り組んでいきたい。

## 文献

- 木原俊行（2006）教師が磨きあう「学校研究」．ぎょうせい
- 木原俊行・島田希・寺島浩介（2015）学校における実践研究の発展要因の構造に関するモデルの開発―「専門的な学習共同体」の発展に関する知見を参照して―．日本教育工学会論文誌，39
- 千々布敏弥（2014）プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティによる学校再生．教育出版